

平成艸紙



おりおりの記

因果はめぐる

公益財団法人 国際金融情報センター 理事長
(元財務官)

加藤 隆俊

最近面談した某銀行のトップによれば、リーマン・ショック後の変遷の中で自行はいつの間にか先進国の銀行界でトップグループの格付けとなり、資金の出し手としての役割を国際的にも期待されている、とのことであった。90年代末にかけてのジャパン・プレミアム問題への対応に走り廻った個人的な経験からすると隔世の感を禁じえない。

そこで、ミクロ・レベルの「因果はめぐる」の二つのエピソードを紹介したい。

一つ目はフィリピンのマニラをめぐるups and downsである。筆者が課長補佐として参加した1976年のIMF・世銀マニラ総会の盛況は未だに強く印象づけられている。しかしADB理事として勤務した1986年には民衆の蜂起によるマルコス政権放逐の混迷の中で先の展開が読めず一家四人大変心細い思いをした。そのマニラで開催された本年のADB総会は、ASEANの先行組へのキャッチ・アップにかけるフィリピンの意気込みを総会参加者に強く印象づけるものとなった。

二つ目はIMFをめぐるups and downsである。筆者は2004年から2010年の6年間ワシントンにあるIMF副専務理事として勤務した。副専務理事としては、中国からサンマリノに至る70ヶ国の担当

国のほか、総務及びファイナンス関係を担当した。加盟国の拠出金で職員の給与を賄う国連やOECDと異なり、IMFは加盟国への融資により職員給与等のコスト



を賄う金融機関である。ところが2006年にかけての世界経済の大好況を受け借入国からの期前返済が相次ぎ、その結果年間4億ドルの経費予算の赤字が予想され、IMFにとって一大ピンチとなった。事態を打開するためIMFの誕生以来初めて職員の約15%という大リストラを決断し、入念にこれを実行した。ところがである。リストラの尻尾が残っている間にリーマン・ショックを受けIMFの玄関に国際収支支援要請国の列ができる事態となった。少ないマンパワーで多くの仕事をこなすIMF職員の苦勞も並大抵ではなからう。ただし「人間万事塞翁が馬」を実感させるエピソードとなった。

これからの10年「塞翁が馬」はどのような動きを見せるのであろうか。